

京都市・乙訓地域公立高等学校教育制度に係る懇談会（第6回）の開催概要

1 日 時 平成24年7月10日（火） 午後2時30分～同5時

2 場 所 京都平安ホテル 白河の間

3 出席者

- (1) 委員14名（欠席1名）
- (2) 府教育委員会 田原教育長、永野指導部長、古市指導部理事、藤井高校教育課長
ほか
- (3) 市教育委員会 生田教育長、荒瀬教育企画監、清水指導部担当部長、三宅高校教育
担当課長 ほか

4 概 要

(1) 前回内容の確認

(2) 協議

ア 「まとめ案」の協議

まとめ案について、内容の確認や補足意見や追加意見、文言修正など協議

◎京都市・乙訓地域における公立高校教育制度の現状等について

- ・ 政権交代で高校の授業料無償化制度が導入されたものの、今後の国の方向性によっては廃止になることも考えられるが、選抜制度を検討する際の背景として、そのような一時的かもしれない制度を挙げてよいのか。
→懇談会の議論の中では、現状を前提として話をするのが最善である。

◎京都市・乙訓地域における公立高校教育制度の改善の視点について

○基本的な方向性

- ・ 基本的にめざす方向性は、中学生が目的意識を持って主体的に高校選択ができるような制度であり、これで良いと思う。

○教育制度

- ・ 高校の特色化を進めていくうえで大事なものは、制度の問題だけでなく、一人一人の先生方の姿勢だと思う。
- ・ 様々な子どもたちのニーズに合わせて、それぞれの学校が学力だけではなく多様な特色を出して、子どもたちを受け入れていくシステムを作っていくことが必要である。
- ・ 特色を出すことにより入試制度が複雑になってしまっただけでは目的がずれてしまうので、非常に難しいかもしれないが、入試制度について教育委員会で整理して一定のシンプルさを保ちながら、教育内容については各学校が特色を出していくことが必要である。

- 例えば職業系専門学科と普通科との間くらいの高校を配置することや、学び直しが堂々としてできるようなタイプの高校を配置するという方法もひとつのセーフティネットだと思う。京都市通学圏には総合学科もないため、行こうと思ったら久美浜高校しかない。入学者選抜制度だけがセーフティネットという発想は少し違うと思う。
- 特色というのは教育内容だけではなく、校風や部活動等すべてを含めたものである。高校側としては単に選抜方法の説明をするのではなく、どのような教育目標があって、どのような教育を生徒にしていきたいのか、あるいはどのような意欲を持った生徒に来てほしいのかを明示してミスマッチを避けていくことが必要である。その上で、具体的な選抜方法の説明や、さらには出題方針や傾向などが含められたら良いと思う。
このようなことをどれだけ中学校や中学生に対して明示していけるかが高校側の課題である。
- それぞれの高校は地元からどのように見られているのかを、きちんと考えるべきである。
中学校と高校の連携に関しては、高校が自校の特色・取組について、できるだけ中学校を回ってこまめに説明することも必要である。
- 地元の子どもたちに選ばれる、地域を大切にすする高校になってほしい。地元の子どもたちは一番目に地元の高校を選び、そして二番目に他の高校を選ぶというくらいの高校づくりをしてほしい。それには行事での連携など様々なやり方があると思うので、公開授業や授業参観のようなものを地元の子どもたちに対してしてもらっても良いと思う。そのようなことも大事にしてもらうことが今回の制度が成功することの1つのカギではないだろうか。
- 制度の検討に加えて、高校でも、さらにきめ細かな指導をきちんと考えるべきではないか。小学校では低学年に対して指導補助を付けたりしている。
さらには、教室に座って座学で勉強することがどちらかというと苦手な生徒に対して、体を動かしたり実習で単位を取ったりするようなことも考えられるのではないか。一人一人に応じたきめ細かな指導をしっかりと考えていく時期だと思ふ。
- 高校に入るまでと高校に入ってからギャップというものを少し感じている。子どもたちが自分自身で目指す方向性を考えることは大事なので、入学者選抜という高校に入るまでの部分と高校の特色による指導などの入ってから部分は、もう少し明確に示してほしい。

○入学者選抜制度

- 最後、入学者選抜制度についてのまとめを中心に締めくくっているが、それまでのプロセスの中で議論された教育制度全般にわたる意見（選び直しや、つまづきを改善するようなシステム）というものは、何かに反映されるのか。
→入学者選抜制度だけでは考えられないことから、その前提条件として考えなければいけない。入学後の学び直しや進路選択を想定した上で、入学者選抜を考えるべきである。
- 基本的には、学力、学習意欲、キャリア意識などの生徒の成熟度に応じて成

長を伸ばすような高校のシステムが必要である。その前段として入学者選抜制度があり、それらがすべて連携しているべきであり、入学者選抜制度だけが独立しているのではないというまとめの方向性をお願いしたい。

- 生徒が努力して希望校に入れるような制度という観点からすると、普通の子が普通に頑張れば結果として希望が実現する、中学校での指導により真面目に勉強した生徒が希望する高校に入れるという制度をお願いしたい。
- 生徒が主体的に目標を持って進路を決めていく事が重要である。目的意識を持って高校に進学してほしいと思うので、まとめの方向性としてはこれで良いと思う。
- 高校はもっと特色などをきちんと説明し、中学校もきちんと情報を捉えてどう選択するかという指導をする。その上で入試があるので、生徒は頑張って勉強をして、学力をつけようとする。そして高校に入り、さらに目的意識を持って充実した高校生活を送る。こういう流れを作る制度を作り上げていくのがこの改革の目的であろう。
- 中学生だけではなく、大人、保護者がどう考えるかということも大事である。保護者の意識がかなり変わってきており、今まで子どもと大人で話ができる場というのがあまりなかったが、公立高校の説明会等の資料を見て、親子で将来についての発展的な話ができるようになった。
- 中学生が行きたい高校に行ける可能性というのは守るべきである。さらには制度をシンプルにし、透明性を出すべきだということも非常に良い。また、合格基準を明確にすべきというような文言も入っているので良いと思う。後は実際に制度に取り込んだ時に、分厚い募集要項にならないようにシンプルにしていきたい。
- 入学者選抜制度の改善における具体的方策が色々書かれているが、それらをすべて導入したらまた複雑になるのではないかという問題もでてくるので、何がわかりにくいのかということを押さえておくことが必要である。
- 様々な目的に合うようなシステムをなるべく取ろうと改善をしてきたが、制度が複雑化してきたために、もう少しスムーズにしようというのが「まとめ」の流れだと思う。後は細かい制度設計のところであまりそういったことが生まれないようにすべきである。
- わかりやすい入学者選抜制度というものが、京都市・乙訓地域だけのことを指してのことなのか府内全体に関わるものかがわかりにくい。通学圏ごとに選抜制度が違うことも問題になっているので、そのあたりも含めたほうがよい。
- 現状では、専門学科等の入試があって、その後に普通科の入試があるが、いわゆる総合選抜型の入試ではない新しいシステムを取り入れようということであれば、好ましい競争環境の中で生徒が主体的に高校を選ぶことができ、高校が特色をもって、生徒や地域の保護者に評価してもらえるという入試制度となるよう是非ともお願いしたい。

- ・ 同じ専門学科でも適性検査があるところとないところがあるので、そのような点はシンプルに整理すべきである。

◎入学者選抜制度の改善における具体的方策について

- ・ 学校裁量の拡充なり、多元的な評価尺度なり、受検機会の複数化なり、多面的な方策で課題の解決にあたろうという姿勢は大変ありがたいが、多面的ゆえに、シンプルでわかりやすくなりうるのかという懸念があるので、幹と枝葉の峻別をして進めていくべきである。
- ・ 相手は中学生だということを十分に考えてほしい。大人目線であったり、高校目線であったりしないようお願いしたい。例えば学校裁量についても、極端な傾斜をつけたりすると、中学生の感覚では、「この教科は勉強しなくていい」という発想になってしまわないか。相手は中学生だという目線を必ず持ってほしい。
- ・ 報告書のみを選抜や学力検査のみを選抜など、一つの資料のみを選抜が果たしてよいのかと思う。一定整理した上で、複雑ではなく、しかも各校の特色には対応できるような選抜制度を作してほしい。
- ・ 学力検査や報告書の在り方において必要なのは、資料の公平性がきちんと保障できる、外へははっきりと示せるような形にしないといけないということである。

◎入学者選抜の日程の在り方について

- ・ 現状の総合選抜の複雑な入学校決定制度を解消すれば、今以上に入試日程が早くなることはないと思う。今の入学校決定方法であるがために、1週間近く時間がかかっているので、それが解消されれば、複数の受検機会を設けたとしてもコンパクトに収まるのではないか。
- ・ 高校現場にいると公立高校の授業料無償化、あるいは私立のあんしん修学支援による影響がものすごく大きい。そういう状況にある中では、それを意識した改革の方向も必要である。現在の入試日程は授業料無償化以前に設定された日程であるし、授業料無償化になってから、公立と私立との関係というのが大きく変わった。その中で現在の入試日程がいいのかということも意識をする必要があるし、公立の中でも前期で合格者がほとんど決まる専門学科と普通科との関係ということにも影響が出てくるのではないか。

◎通学区域の設定について

- ・ 学力格差や通学圏の拡大が及ぼす様々な課題などの懸念材料に対しては、高校が制度を超えて、中学校と十分連携をとって様々な配慮をして取り組んでいくべきである。
- ・ 通学区域の設定、特に乙訓地域については東西南北4つの通学圏から南北2つの通学圏に変わった時に、乙訓地域は交通の便が非常に便利なのでという議論があった。生徒・保護者のニーズが一番大きなことになっているが、通学圏

が4つから2つになるときからも言われてきた背景についての記述が必要である。

- ・ 通学圏については、2つを1つにすべきとの意見が多いことを十分に踏まえたまとめにしたい。そのためには、選んでうまくいかなかった場合のセーフティネットについてもきちんとしないといけないし、個々の中学生についてもきちんとした対応ができる制度でなければならない。ただ「自由に選びなさい」、「選んでまずかったら知りません」というわけにはいかないの、そのあたりについて十分配慮することも必要である。
- ・ 通学圏が拡大することによって、高い学力の生徒は行きたい学校、目標とする学校に行けるとするのは、進路を保障するという意味で望ましい。
- ・ それぞれが自分のキャリアや将来を考えて、保護者や先生方と相談したうえで主体的に選べるということを大前提にすると、選択肢はいくつか用意する必要がある。ただし、自分の将来を考えたときに選択肢が多いと、見様によれば非常に複雑な様々なものが並んでいることになるので、その課題をどこまで少なくしていくかが学校側で努力することだと思う。

◎中学校における進路指導の充実について

- ・ 各学校がパンフレットや学校説明会、部活動紹介の資料などをたくさん持って来られるのは非常にありがたいが、それだけが中高の連携ではない。持って来られる内容を絞っていただきたいし、比較ができないので、もし可能であれば、高校間で共通したものを持ってきていただくとか、提示していただくとかを考えてほしい。
- ・ 9年間の義務教育を終える子どもたちが、努力すれば希望する高校に入学できる制度であって、目的意識を持ってしっかり高校選択をすることが大事である。何を目指すのかを中学生・保護者・教職員にわかりやすく示していけるか、9年間のキャリア教育を前提に検討していくことが、この制度改善を成功させるためには必要である。
- ・ 昨年、高校生の緊急就職支援で生徒たちに関わったが、その中の8割方の生徒たちは中学校時代に不登校で、高校では昼間定時制だった。その生徒たちが企業の面接に行くと、「なぜこの定時制を選んだのか」ということを聞かれるようで、そのときに自分自身で選んだかということが重要になると実感した。中学校時代には不登校だったが、高校でもう一回チャレンジし、「自分で決めました」というのはすごく説得力があるし、やる気があり、企業には好ましく映る。自分で選択するという事は非常に重要な要素ではないか。
- ・ どこにでも行ける可能性があるということは、本当に自分が挑戦することになるし、それを支える中学校段階でのより丁寧な進路指導が必要である。これまでのように小さい範囲で生徒を送り出していく指導よりは、さらにきめ細かく、なおかつ質的な変化を求められるような進路指導が必要になる。どのような制度になっても生徒一人一人にもっと丁寧に関わってもらいたいというのが保護者の願いでもある。

- ・ 多様なものを用意すれば、たくさんある中からどれを取り上げるかというきめ細かさが必要になり、きめ細かな進路指導ということの重要性を改めて共通理解し、認識すべきであり、中学校もそれに応えるべく努力をする必要がある。

◎おわりに

- ・ 5段落目の「時間をかけて分かりやすく説明する必要がある」とあるが、これまで時間もかけて議論してきたので、もう少し具体的に中学校との連携や進路指導の問題などを明確に記述した方がよい。

◎まとめについて

本日出された意見を反映した上のまとめ案については、改めて各委員に送付するので確認いただいた上で、何か意見等があれば出してほしい。できるだけ早い時期に府・市の教育長に懇談会のまとめを提出したい。

イ 座長あいさつ

昨年の10月から本日6回目まで、大変お忙しい中、精力的に意見を交換し、まとめの方向性を決めていただいた委員の方々や、意識調査に回答いただいた、1万1千人の方々に対しても感謝をしたい。

中学校と高校で、考えの異なる意見や対立する意見もあったが、委員の方々が中学生や保護者を第一に考えて、議論をしていただいたことで本日のまとめができたと思う。

将来の社会を担う若い人たちに、生きる上で大事にしてほしいというメッセージ、アピールを大事にしたいというところや、もしうまくいかなかった場合は、セーフティネットを用意するという意味合いもまとめに含めることができると思う。

それらの方向性を作っていただいたことに感謝し、今までお付き合いいただいたことについて、お礼申し上げます。本当にありがとうございました。

(3) 両教育長あいさつ

ア 府教育委員会教育長あいさつ

委員の皆様方におかれては、大変お忙しい中、毎回熱心に御議論いただき、厚くお礼申し上げます。

昨年度の10月末から年度を越えて精力的に会を開催いただき、現在の制度や学校の状況を踏まえた意見や、それぞれの立場からの京都市・乙訓地域の望ましい教育制度の在り方についての提言等、さまざまな視点から多くの意見を頂戴した。また、中学生・高校生及び保護者を対象に、公立高校入試制度に関する意識調査を実施し、1万1千人を超える多くの方々からの意見を踏まえ、分析も交えて議論を深めていただいた。

本日の協議も踏まえて、後日、懇談会としてのまとめを提出いただくことになると思うが、教育委員会としては、その趣旨を十分踏まえて、京都の未来を創造する人づくりに向けて、生徒一人一人の個性や能力を最大限伸ばすという基本的な視点に立って、入試制度をはじめとする高校教育制度の改革に取り組んでいきたい。

委員の皆様におかれては、引き続き、本府の教育行政の推進に御理解と御協力を賜るよう、お願い申し上げます。

本日までの皆様の活発な御協議に感謝を申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。
ありがとうございました。

イ 京都市教育委員会教育長あいさつ

小寺座長をはじめ各委員の皆様方には、精力的また活発な御議論を展開していただき、心からお礼を申し上げます。

今回のまとめは、高校教育制度に対する深い洞察や、様々な角度からの議論の結晶、賜物であり、京都の高校教育に寄せる期待の大きさを感じるし、その施策の実現に向けての責任の大きさを感じる。

現行の高校教育制度は、これまで大きな役割を果たしてきたが、1万1千人を超える多くの方々からの意見や委員の皆様方の意見を頂く中で、成果とともに課題も多く存在することが改めて浮き彫りになった。その上に立ち、さらなるステップに繋がるような大枠を懇談会に示していただき、皆様方の思いに応えるために、何より生徒自身が主体的に進路選択をして、高校に入って自らの力を高めていける制度になることを願っている。

制度を変えること自体を目的にするのではなく、重要なのは制度を効果的に機能させて、生徒自身が力を発揮し、また各学校が学校改革を徹底していくことが不可欠であると思う。高校自身がより選ばれる存在になる、そのための改革をやっていくことも非常に大事になる。

懇談会のまとめを元にして、市民の方の意見も伺いながら、府・市両教育委員会において、具体的な制度設計を早急にさせていただくことになるが、今後も委員の皆様方には、一層の御指導、御鞭撻をいただきたいと思う。本当にありがとうございました。